学生海外調査研究	
ローラン・プティ《若者と死》－第二次大戦後のフランスの舞踊界での「事件」	
深澤 南土実	比較社会文化学専攻
期間	2010年9月6日～2010年9月24日
場所	フランス
施設	シネマテーク・ド・ラ・ダンス、パリ・オペラ座附属図書館

内容報告

1. 調査の目的

ローラン・プティ(Roland Petit)は、第二次世界大戦後、様々な「新しいバレエ」作品を創作した。特に、1946年初演の《若者と死》(*Le jeune homme et la mort*)は、当時のフランスの芸術界で最も傑出した「事件」と言われた。現在に至るまで、《若者と死》は男性ダンサーや観客を惹き付け、再演され続けている。

筆者は修士論文において《若者と死》の何が衝撃的/革新的だったのかを映像・資料を通して検討することによって導き出した。しかし、筆者は《若者と死》を映像でしか観ておらず、生の舞台から会得するものを、また、映像には写らないものを確認することが必要であった。また、日本では入手することの出来ない資料の多くを確認し、研究をさらに進めることが必要であった。

さらに、論文執筆のための研究において、ローラン・プティ、またシャンゼリゼ・バレエ団(Le Ballets des Champs-Élysées)の重要作品を調査し、戦後のフランスの舞踊の動向や、舞踊史におけるそれらの位置を検討する。そのためにフランスに赴き、関連文献、資料の収集をすることが必要であった。

特に、舞踊の映像は入手不可能な場合が多い。幸い、《若者と死》は数々の有名なダンサーが踊り、市販されている映像が多い方ではあった¹⁾。しかし、初演の映像を一部しか観ることが出来なかった。

本調査の目的は、《若者と死》の初演の映像や、プティの初期の作品映像の視聴のために、パリ市内にある、舞踊関係の映像資料館、シネマテーク・ド・ラ・ダンス(Cinémathèque de la Danse)への訪問、そして、資料調査をするために、パリ・オペラ座附属図書館(Bibliothèque-Musée de l'Opéra de Paris)への訪問を最大の目的とした。

2. 調査施設

2.1 シネマテーク・ド・ラ・ダンス

シネマテーク・ド・ラ・ダンスでは、主にローラン・プティの作品の所蔵映像を全て視聴した。また、合わせて、プティと同時代の偉大な振付家、モーリス・ベジャール(Maurice Béjart)やシャンゼリゼ・バレエ団に関するバレエ・リュスの貴重な映像も多く視聴した。プティに関する映像は、市販されていない初期の映像を多く視聴したが、多面的で独創的な彼の思想を知ることが可能となった。

また、調査の目的であった、初演のジャン・バビレ(Jean Babilée)の踊る《若者と死》の全映像を視聴し、初演の振付を全て知ることによって、さらに、自身の研究の発展に貢献したと言える。具体的に述べると、女性が舞台に登場する時間が後世の作品よりも早いこと、二人のデュオが多いことも、初演の特徴である。後々のダンサーにはない雰囲気やバビレが醸し出していることは既に部分的な映像でも知っていたことだが、全映像を通して観ることによって、様々なことを理解できた。

振付の特徴を、バビレが「全ての身振りが感情と結びついていた。これは振付けではない。全ての身振りに必然性がある」と語っているように、ミモDRAM(無言劇)の体裁をとる珍しいバレエである。そして、リハーサル時にはジャズの曲に合わせて踊っていたが、ジャン・コクトーの意向³⁾で本番直前にバッハの「パッサカリア」(Passacaille B.W.V582)に置き換えられたため、即興性の高い作品である。しかし、近年のダンサー達は、プティの振付とともに、曲に合わせて稽古を行っているため、振付の違いは目で見て理解出来るが、その即興性はわかりづらかった。しかし、バビレの踊りを観ていると、曲に合わせているわけではないことが明白であった。

さらには、この作品はコクトーが当時「現代のニジンスキー」と認めたバビレのために脚本を考えたことも起因しているだろうが、バビレは「演じている」ように見えないのである。非常に自然にこの若者を踊っているに考えられた。このバビレの自然な「演技」に関しては、本調査の最終日に筆者がバビ

レに直接会い、インタビューをしたことにより、より明らかとなった。

2.2 パリ・オペラ座付属図書館

国立図書館の一部でもある、オペラ座内にある図書館の所蔵資料をパソコン等検索機で検索することは未だに出来ず、昔ながらのカード式で探して司書の方に依頼する。すなわち、所蔵資料は、現地に行ってみないとわからないのだが、予想以上に資料が豊富にあった。《若者と死》だけでも、初演当時の新聞・雑誌の切り抜きが大量に保管してあった。それらをざっと見る限りでも、バビレが、当時アイドル的存在であったのであろうことは想像できた。また、数々のフランスの舞踊史の本の中にも、必ずバビレの紹介と写真は掲載されている。日本ではほとんど知られていないダンサーであるが、フランス舞踊史の中では重要なダンサーなのである。

シャンゼリゼ・バレエ団に関する新聞・雑誌の資料も、《若者と死》と同様に多く所蔵しており、このバレエ団が、当時の人気バレエ団であり、紙面を賑わせていたことが伺えた。コクトーが《若者と死》を構想した時のデッサンなどもあった。

わずか5年間(1945-1950)しか存続しなかったバレエ団ではあるが、シャンゼリゼ・バレエ団において、現在《若者と死》とともに、パリ・オペラ座のレパートリー作品でもあるプティ振付《旅芸人》(*Les Forains*)や《ランデブー》(*Le rendez-vous*)を始めとして、ピカソやマリー・ローランサン、ブラッサイやジャック・プレヴェールなどの一流の芸術家たちと常に新作を発表した。46年のロンドン公演でも喝采を浴びている。このシャンゼリゼ・バレエ団については、いまだ研究がなされていない。

3. ダンサーへのインタビュー

シネマテーク・ド・ラ・ダンスのディレクターであるパトリック・バンサール氏は、2000年に「バビレの神秘」(*Le Mystère Babilée*)という4時間の映像を作成した。その中でも前半の2時間は、ほぼ《若者と死》にまつわる映像、バビレやコクトー、関係者らへのインタビューである。バンサール氏は《若者と死》について、この作品が戦後最も革新的で現代的な作品であり、それはバビレという天才的ダンサーが踊ったから、と筆者に語った。「適切な演技者がいなければ、そう容易には上演できるバレエではない」⁴とも言われるほど、この作品はダンサーで全てが左右される作品なのである。

バンサール氏を通じて、現在87歳のバビレ氏に会うことが出来た。高齢と思えぬほどしっかりとした声で《若者と死》について語っていただいた。音楽についてはメロディを奏でながら説明して下さった。

バビレ氏が、「あの若者は私自身であった」と語ったことはこの作品にとって非常に重要な発言である。また、コクトーが後年、バビレに、「このバレエ作品

は君のダンスだ。これを体現出来る人は誰もいない」と手紙で書き送ったという。プティがコクトーの死後に振付けを変更したことについて、コクトーが生きていたら認めていなかっただろうとも語っていた。

それほど、《若者と死》は、ジャン・バビレと強固に結ばれていたのであり、初演の46年から20年間はバビレが何百回と踊り、バビレ以外のダンサーは誰も踊らなかったことが証明している。その後は素晴らしい作品の再演を望むプティとダンサー達の手によって作品は変容、発展してきている。しかし、バビレは解釈の間違った踊り方や振付けを認めていない。バビレによれば、作品は「コクトーが私達に生命を吹き込んだもの」であり、再演の時に「《若者と死》がデフォルメされたが、そのように変える作品ではない」と話す⁵。このような初演のダンサーと振付家との関係は、一回性という特性を持つ舞踊だからこそおこる問題とも言える。「踊ると言う言葉は似合わない作品」、「演じていて、作品に没頭してしまうあまり、若者が自分自身になってしまう、錯覚、現実」⁶を持つという熊川哲也らの発言からは、ダンサーたちが作品への没頭ゆえに危険をさえ感じていることさえが明らかとなった。それほど、強さを持つダンスとも言える。

また、筆者は、修士論文において、《若者と死》の「死」について、若者は「生」を象徴するが故に、「死」と対極的存在であること、さらに若者の未曾有の大量死をもたらした第二次世界大戦の終了直後という時代性も考慮すると、「死」は若者にとって避けることの出来ない運命、現実と捉え、戦争直後の若者の絶望や苦悩という現実がこの作品の見えない舞台となっていたのではないかと考察した。そのような現実の等身大の若者がバレエ作品に登場する点が当時革新的であったと考察した。

以上のことは、今回の筆者によるインタビューでバビレが語った、「作品の重要な点は現実の男性(real man)が踊っていること」、という言葉によってもさらに強調された。

そのような今を生きる等身大の若者をバレエ作品に登場させたことが、《若者と死》が第二次世界大戦後、当時のフランスの舞踊界で最も傑出した「事件」、「新しいバレエ」であった最大の理由と言えらるう。

4. 《若者と死》の観劇

映像で観ることに限定されていた作品を生舞台で観ることにより、作品へのアプローチは異なる。筆者は生の舞台を鑑賞しないまま《若者と死》を研究していたが、ついに観る機会を得られた。

観劇した日はローラン・プティ・ガラの日だったために、政治的重鎮が客席にいるなど、華やかで社交的な色が強く、フランスでのバレエの文化的価値の高さを顕著に表していたと言えよう。《若者と死》は最後に上演され、最もアクロバティックな振

付けであり、その日最高の観客の歓声と拍手を受け、人気の高さをしのばせた。また、振付の点や装置の点など、市販の映像だけでは確認できないことを多く得た。

5. 今後の研究へ

以上のように、本調査は非常に充実したものとなった。このように、バレエ団や振付家や作品の研究を、文献のみで行うのではなく、映像と実際の舞台を確認し、実際に踊ったダンサーにインタビューをすることにより社会や舞踊を捉える、という研究は舞踊学という枠に収まらない研究であり、本調査はグローバルな広い視野での先進的な調査研究であったと考える。

本調査の主題であった《若者と死》についての研究は恐らく学位論文（博士論文）執筆の第一章をしめるであろう。

シャンゼリゼ・バレエ団についてはいまだ研究がなされていないため、筆者の学位論文での主要テーマとなる。シャンゼリゼ・バレエ団が他の芸術やその後に続く舞踊に与えた影響は計り知れないものがある。シャンゼリゼ・バレエ団について、また同バレエ団に属していた時代にプティが振付けをした重要な作品の調査を通し、戦後のフランスの舞踊の動向や社会的背景を導き出し、舞踊史におけるそれらの位置を考察する。

今回の調査に基づき、帰国直後にはお茶の水女子大学における表象芸術論領域研究発表会にて発表を行った。また、第62回舞踊学会大会にて《若者と死》とシャンゼリゼ・バレエ団をテーマに研究発表することが決定している。

注

1. 筆者が映像分析の対象としたダンサーは以下の通りである。ジャン・バビレ、ルドルフ・ヌレエフ、ミハイル・バリシニコフ、ニコラ・ル・リッシュ、熊川哲也。以上の5人のダンサーの映像の中で、市販されているものは3点。バビレの映像は、Bensard(2000) *Le Mystère Babilée* より、バリシニコフの映像は、映画「ホワイトナイツ」に短縮版が使用されたために、使用した。
2. Bensard(2000) *Le Mystère Babilée* の中で、バビレはおペラ座のエトワール、ジェレミー・ペランガールにこのように伝えている。
3. コクトーが「偶然的な同時進行性の神秘」(le mystère du synchronisme accidentel)と名付けた、音楽的実験。
4. Ries, Frank W.D(1986) *The Dance Theatre of Jean Cocteau*. UMI Research Press:Michigan.
5. Bensard(2000) *Le Mystère Babilée*
6. 熊川哲也《若者と死》。(2007)記録映像。TBS:東京。

参考文献

- 平田友子(1999) ローラン・プティ研究—<モダン>に関する考察.お茶の水女子大学人文科学紀要 52 : 193-209.
- 平田友子(1993) ローラン・プティ研究.お茶の水女子大学舞踊教育学専攻卒業論文(1993年度).
- 松田和之(1999) 内在する“若い女性の姿をした死”—ジャン・コクトー『若者と死』小論.福井大学教育地域科学部紀要第1部人文科学外国語・外国文学編 : 41・53.
- コクトー、ジャン:秋山和夫訳(1991) ぼく自身あるいは困難な存在.筑摩叢書:東京.
- Aschengreen,Erik:Tr. to English by Patricia Mcandrew and Per Avsum (1986)*Jean Cocteau and the Dance*. Gyldendal:Copenhagen.
- Beaumont,Cyril(1954) *Ballets of Today*. Putnam and Co:London.
- Boll,André(1956)*Jean Babilée*.Robert Laffont:Paris.
- Clair Sarah(1995)*Jean Babilée ou la danse buissonnière*:Van Dieren :Paris.
- Craig-Raymond,Peter(1953) *Roland Petit*.Losely Hurst:Surbiton, Surrey.
- Fiette Alexandre(Ed.)(2007a)*Roland Petit a l'opera de Paris : Un patrimoine pour la danse*. Opera national de Paris:Somogy editions d'art:Paris.
- Joyeux,Odetta(1967)*Le monde merveilleux de la danse*.Hachette:Paris.
- Koeing,John Franklin(1980)*Le Danse contemporaine*. Fayard: Paris.
- Lidova,Iréne(1956) *Roland Petit*.Robert Laffont:Paris.
- Lidova,Iréne(1969) *Roland Petit*.Sodal:Paris.
- Lobet,Marcel(1958)*Le ballet français d'aujourd'hui:de Lifar à Béjart*. Ad.Goemaere:Bruxells.
- Mairie du XXe arrondissement,Mairie du 1er arrondissement(1985)*4 Siècles de Ballet à Paris. Délégation a l'action artistique de la ville de Paris*:Paris.
- Michaut,Pierre(1950) *Le ballet contemporain 1929-1950*. Plon:Paris.
- Minyama,Philippe(1998)*Jean Babilée*. Marval:Paris.
- Pastori,Jean-Pierre(1997)*La danse,des Ballets russes à l'avant-garde*. Gallimard:Paris.
- Petit,Roland(2003)*Roland Petit:rythme de vie:entretiens*

- avec Jean-Pierre Pastori*. La Bibliothèque des Arts: Lausanne. Ed. Mercure. 17.03.1946: Paris.
- Petit, Roland (1993) *J'dansé sur les flots*. Grasset : Paris. *Les Ballets des Champs-Élysées* Ed. Mercure. 06.1946: Paris.
- Ries, Frank, W.D (1986) *The Dance Theatre of Jean Cocteau*. UMI Research Press: Michigan. *Les Ballets des Champs-Élysées* Ed. Mercure. 12.1946: Paris.
- Chardans, J.-L. (1954) *Jean Babilée l'ensorcelé de la danse*. Paris-Théâtre n. 89. 10: 28. *Les Ballets des Champs-Élysées* Ed. Mercure. 1948: Paris.
- McLain Stoop, Norma (1979) *Babilée: The charismatic career of Jan Babilée*. Dance magazine v. 53. 7: 64-77. *Les Ballets des Champs-Élysées* Ed. Mercure. 1949: Paris.
- Dumesnil, René (1946) *Ballet des Champs-Élysées "Le jeune homme et la mort"* Le Monde. 27.06. *Les Ballets des Champs-Élysées* Ed. Mercure. 1950: Paris.
- Gandrey, Rety (1946) *Sur un assassinat*. Arts 5.07. *Ballet de L'opéra Roland Petit* 9.2010: Paris.
- Luquet, René (1946) *Jan Babilée danse "Le jeune homme et la mort"* Ballet de Jean COCTEAU. Ce Soir 2.07. 映像
- プログラム Bensard, Patrick (2000) *Le Mystère Babilée*. Document, Paris.
- Soirée de Ballets* Ed. Chêne. 06.1945 : Paris.
- Les Ballets des Champs-Élysées* Ed. Mercure. 12.10.1945: Paris.
- Les Ballets des Champs-Élysées*